総合都市研究　第26号　1985

1984年長野県西部地震が王滝村住民に与えた心理的影響

序
対象と方法
地域特性と被害状況
結果と考察
1　生活困窮感（度）
2　災害後の身体症状・不安・うつ
3　関心事・不安内容
4　地震再来の不安
5　行方不明者に関する噂と感情
6　県・村，報道，研究者に関する噂と感情
7　援助行動
8　災害観

若林佳史*
望月利男**

要　　約

1984年長野県西部地震の被災者89名に対し被災約2.5ヶ月後にアンケート調査を行なった。その結果，被災後多数の者に不眠，全身疲労感などの身体症状が認められ，地震再来の不安が高かった。行方不明生存の噂が発生し，生き残ったことに対し罪悪感をもつ者もいた。また，援助行動が起こり，被災者同志の親近感が生じ，外部者に対する拒否的感情が生まれた。

序

これまで主に欧米において，地震，洪水，噴火，竜巻，火災など様々の災害時における避難行動や情報伝達等について，また，短期的・長期的な心理的影響について数多くの事例研究がおこなわれてきている。災害時・災害後の人間行動・心理を把握することは，災害をより総合的に理解するために，また，被災者に対し生活物資上の援助のみならず精神的な援助を行なうためにも，更に，人間の潜在的な心理を明らかにする手がかりを与えてくれるという点でも重要であると考えられる。

1984年9月14日に発生した長野県西部地震によって被災地・長野県木曽郡王滝村では，約3,600万m^3の大規模な斜面崩壊が生じた。その結果，河川が塞き止められると同時に29名が生埋となり，また，地震・斜面崩壊のため家屋に被害が及び，道路が寸断され外部との交通が困難となり，唯一の診療所も短時間ではあるが閉鎖され，病人・老人はヘリコプターにより村外に運ばれる状況にあった。このように，王滝村住民の多くは被災後1～2か月にわたり生活に多大な影響を受けたが，このような状況において被災者はどのような心理的反応を呈したのであろうか。われわれは，これを明らかにするために，アンケート調査を行なった。

*東京都立大学人文学部
**東京都立大学都市研究センター

対象と方法

対象は長野県木曽郡王滝村立王滝小・中学校の全児童生徒の保護者93名（１世帯につき１名；王滝村総世帯数の23％）であり，1984年11月31日～12月10日（被災約2.5カ月後）の期間にアンケート調査を行なった。その結果89名（男性47名・女性42名）から有効回収があった（回収率96％）。年齢は30～60歳に分布し平均は41.4歳（標準偏差6.3）であった。調査内容は以下に述べる項目のほか，性格・親戚数・交際範囲などである。

また，1985年９月には王滝村に隣接し，自然環境・社会環境の類似した開田村の開田小学校の全児童生徒の保護者90名（男性34名，女性56名，平均37.9歳，標準偏差7.2）に対して，普段の身体症状，援助規範と援助，災害観に関して補足調査を行なった。

王滝村で用いた実際のアンケート用紙は補遺1に示す。なお，質問文の作成にあたってはSDS，STAIを参考にした。

地域特性と被害状況

(1) 農　業

王滝村は木曽御岳山の東南に位置し林業と登山観光に依存する村である。対象者の内，稲作を行なっている者・畑作を行なっている者・山林を所有している者はそれぞれ，41.6％，47.2％，38.2％であるが，専業農家は皆無であった。地震で田，畑，山林に被害を受けた者は，所有者のそれぞれ，8.1％，4.8％，23.5％であった。

(2) 親戚関係

同村内に10軒以上親戚のいる者は36.0％，５～９軒の者は24.7％，１～４軒の者は16.9％であり，親戚がいない者はわずか15.7％にすぎなかった。また，83.1％の者は回答者またはその家族が村の集まりや会合によく出席すると答えており，地縁・血縁的な人間的結びつきが強い地域と考えられた。

(3) 過去の災害

過去，王滝村において発生した自然災害は少なく，1978年10月の木曽御岳山の噴火（田畑に降灰があったが被害は軽微）と1976～80年の群発地震（無被害）が挙げられるに過ぎない。同村は東海地震に係る「地震防災対策強化地域」の周辺に位置するが，図10に示すように今回の地震以前にローソク・懐中電灯・非常食糧などを準備していた者は9.0％と少なく，本地震は住民の多くにとって突然の出来事であったと言えよう。

(4) 本地震の被害

本災害においては，14名が死亡（遺体確認）し，15名が行方不明（以下，死亡と見なす）となった。調査対象者のうち，怪我をした者はいないが，家族，親戚，友人に死者のいる者は，それぞれ，1.1％，24.7％，39.3％であり，49.3％の者が死者と何らかの繋りがあった（注１）。

また，王滝村全体では，全壊14戸，半壊73戸，被害率11.8％の家屋被害があったが，対象者のうち住家が全壊した者はおらず，半壊した者は21.3％であった。

結果と考察

(1) 生活困窮感（度）

地震が生活に与えた客観的な影響については，中林・塩野・望月（1985）が詳細に検討したが，本報告ではまず主観的な全般的生活困窮感ないし生活困窮度について検討する。図１は被災時から調査時まで生活はどのくらい困ったかを調べたものであるが，82.1％の者が困ったと感じていた（注２）。

ところで，本論文の目的ではないが，ここでどのような生活上の制限が生活困窮感を高めるのか，検討を試みたい。表１は多くの生活支障要素の内，サンプル数が多くないため，仮住まい期間，自宅の断水期間，自宅で食事を作るまでの期間，自宅

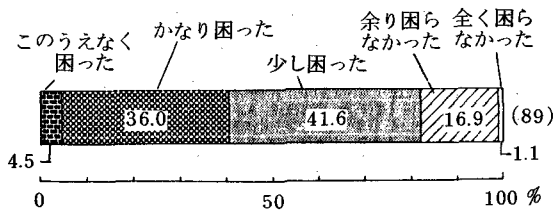

図１　生活困窮感（度）

で洗濯をするまでの期間，自宅の修理，の５項目と性別の計６項目を選び，これらと生活困窮感（度）の関連を数量化Ｉ類で調べた結果である。重相関係数は0.51と高くはないが，カテゴリー・ウエイトを見ると各生活項目の復旧までの期間の遅滞は生活困窮感を高めるように働いており，特に仮住まい期間，自宅の修理が高い関連をもっていた。また，女性の方が「困った」と感ずる傾向があった。このように，実際の生活支障と主観的な困窮感（度）の間に対応が認められた。

表１　生活困窮感（度）の要因

アイテム	カテゴリー	カウント	ウエイト	レンジ（偏相関）
性別	男性	21	−0.32	0.55
	女性	28	0.24	(0.37)
仮住まい	仮住まいせず	6	−0.02	0.59
	仮住まい１～３日間	22	0.11	(0.22)
	仮住まい４～14日間	18	−0.20	
	仮住まい15日間以上	3	0.39	
自宅の断水期間	０～６日間	19	−0.03	0.05
	７日間以上	30	0.02	(0.03)
自宅で食事を作るまでの期間	０～６日間	13	−0.06	0.09
	７日間以上	36	0.02	(0.05)
自宅で洗濯するまでの期間	０～６日間	18	−0.15	0.24
	７日間以上	31	0.09	(0.13)
自宅の修理	修理不要	13	−0.37	0.50
	修理した	36	0.13	(0.31)

(2) 災害後の身体症状（愁訴）・不安・うつ

災害時から調査時までの身体症状（愁訴）を調べると（図２），不眠が最も多く86.5％，次いで，全身疲労感85.4％，食欲不振65.2％，頭痛44.9％動悸44.9％，便秘・下痢37.1％，血圧上昇29.2％であり，何らかの身体症状（愁訴）を持つ者は94.4％に達していた。これらは，いずれも女性の方が高率であり，年齢差はなかった。もちろん，これらのデータからはこれらが地震の影響であるか否かは分からない。そこで，自然環境・社会環境の類似した隣村・開田村の開田小学校の児童生徒の保護者90名の「普段の」身体症状（愁訴）を調べると，図3に示すようにその多くは普段より女性の方が多く，必ずしも地震の影響は女性にのみ強く働くとは言えないかもしれない。

これらは血圧上昇を除き，不安・うつの代表的身体症状（愁訴）であり，心因性であると考えられる。これらの内，血圧上昇は客観的測定をしていない場合も多いであろうからこれを除き，他の６項目の回答「かなり」，「少し」，「ない」にそれぞれ２，１，０点を配し，合計点（とりうる範囲は０～12，以下，身体症状得点と称す）を算出し，更に，便宜上４段階（０～２点，３～５点，６～８点，９～12点）にわけた。

そして，身体症状（愁訴）の関連要因を調べると，これらは仮住いをし生活困窮感（度）が高い者に多かった（図４）。また，性格的には元より情報不安定な者に多く（図５），これらの人は災害によっても心理的影響を受けやすいと考えられた。

災害後の不安・うつも女性の方に多かった（図６）。また，緊張感は若年層（３０歳代）に多かったが，一方で無気力感は中高年層（５０歳以上）に多く（図７），長崎水害を契機としたうつ病は

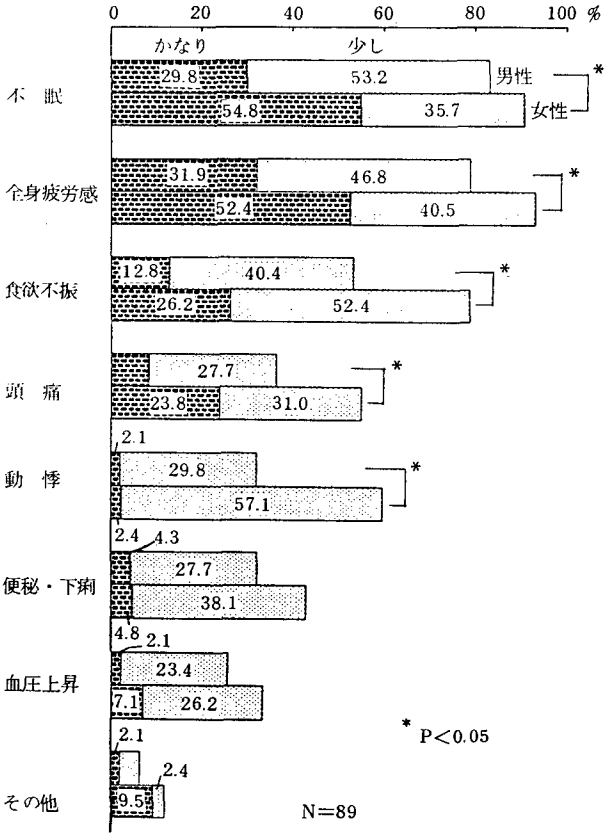

図2　被災後2.5か月間の身体症状(愁訴)
(王滝村住民)

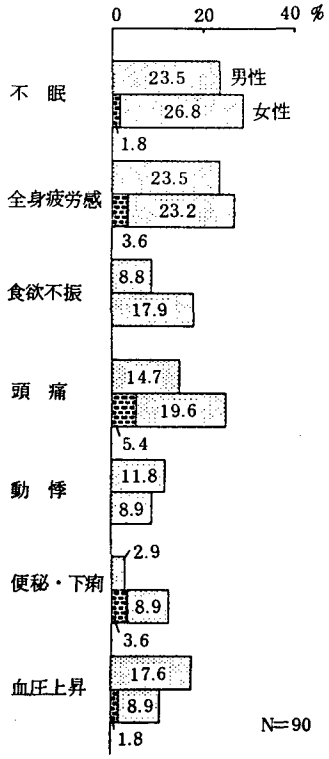

図3　普段の身体症状(愁訴)
(開田村住民)

中高年者においてのみ見られたこと(荒木他, 1985)を考え合わせると，慣れ親しみ一体感をもってきた環境や家を喪失する災害体験は特に老人に無気力感を含むうつ感情を生じさせると言えるかもしれない。老人と災害に関する報告は少なく(Friedsam, H.J., 1961; 若林・望月, 1985), 今後,一層の検討が必要であろう。なお，身体症状(愁訴)と不安・うつの間には顕著な関連があり,身体症状(愁訴)が多い者ほど不安・うつも高かった。身体症状は生活環境の変化・悲嘆・余震に伴う緊張感・不安などが原因であると考えられ，急性の心的外傷後ストレス病(Post-traumatic Stress Disorder, DSM－Ⅲ)と考えられた。

これらの症状の経時的変化は今後の課題である。

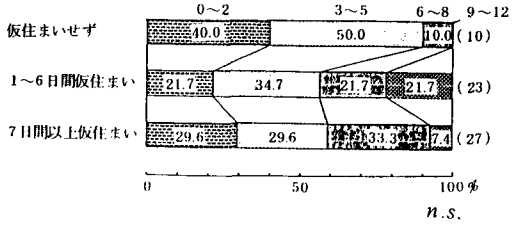

図4　仮住まいと身体症状(愁訴)

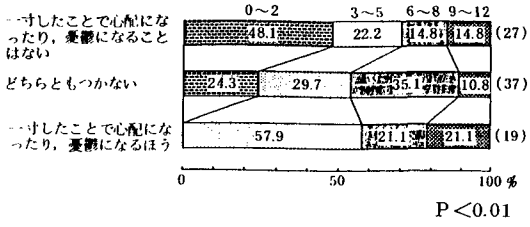

図5　情緒不安定性格と身体症状(愁訴)

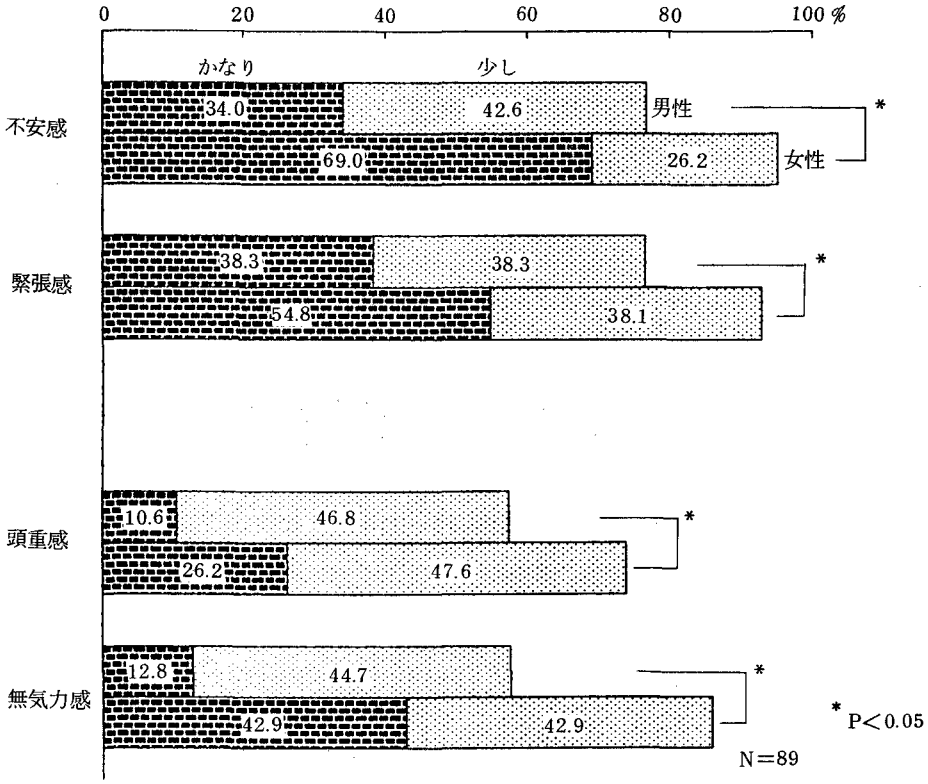

図6　性別心理反応

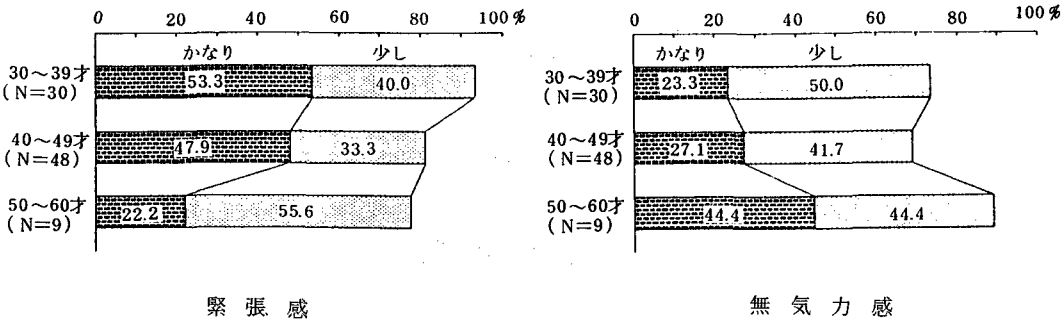

図7　年齢別心理反応

(3) 関心事・不安内容

次に災害後に考えたことを調べた（図8）。当時，序でも述べたように，斜面崩壊のため29名が生埋となり，道路が寸断され，塞き止められた河川が決壊する恐れがあったが，このような状況下においてほとんどの者が行方不明者や道路の復旧のことを考えており，次いで，家族の健康，家の修理，地震再来の順となっていた。

これらの内，地震再来は女性の方（男性89.6％，女性97.6％）が，将来観光客が来るかということは男性の方（男性80.9％，女性69.0％）がよく考えていた。

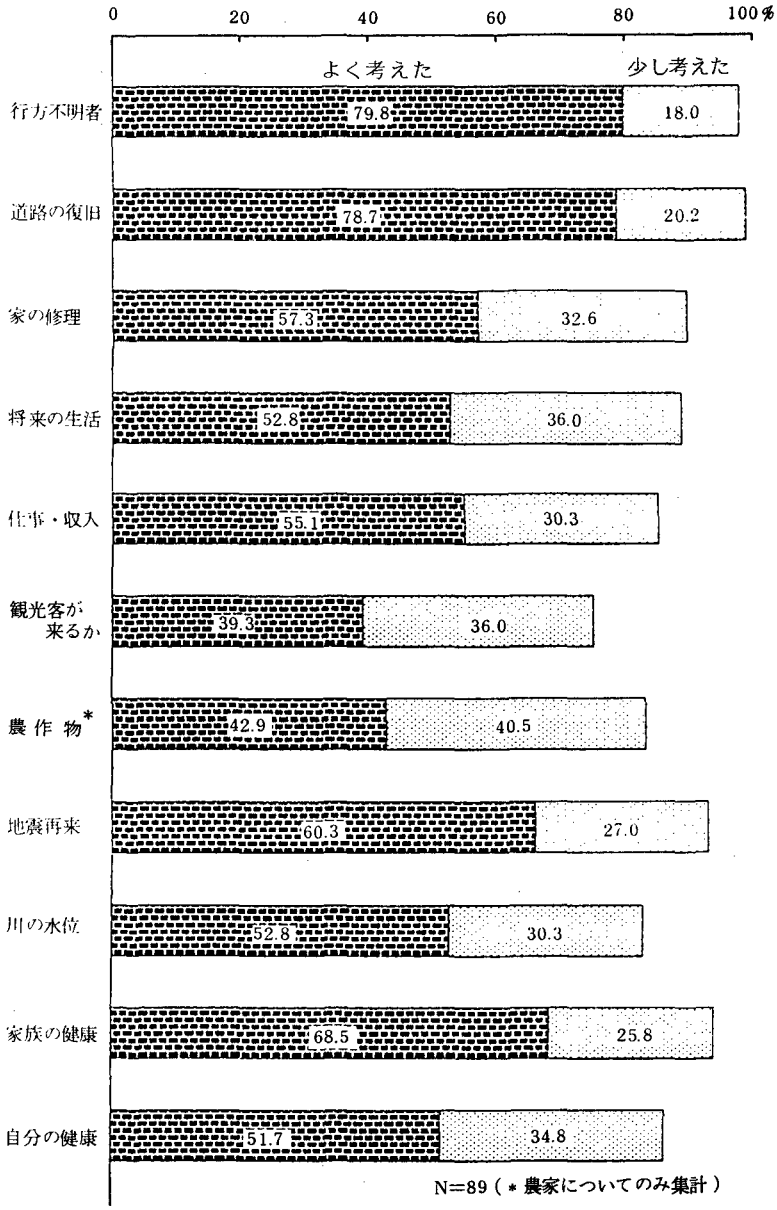

図8　関心事・不安内容

(4) 地震再来の不安

調査時点（本震後約2.5か月）では余震は既にほぼ平静化していたが，地震再来に関し大多数（95.5％）の者が不安をもっており，女性・生活困窮感（度）の高い者の方が不安は高かった（図9）。そして，将来の災害時の行動を家族で打合せるようになった者は71.9％（開田村住民では42.2％），ローソク・懐中電灯・非常食糧などを準備するようになった者は69.7％（開田村住民では14.4％）おり（図10），いずれも生活困窮感（度）が高い者・地震再来不安の高い者の方が対策をとる傾向にあった（図11）。そして，将来の地震時に消防・警察・役場の人はすぐ救助に来ないと思う者は47.2％（開田村住民では37.8％）おり（図12），また，将来の地震時には死ぬかもしれないと考えている者は37.6％（開田村住民では10.0％）いたが（図13），いずれも中高年者の方が楽観的に考える傾向にあり，この傾向は「地震防災対策強化地域」の一般住民のそれ（東京大学新聞研究所，1981）と似ていた。一般に中高年者の方が将来のことに関しては危険性を過小評価しやすいのかもしれない。いずれにしても，被害を受けた王滝村住民よりも開田村住民の方が楽観的であり，王滝村住民においては地震再来不安が高く，無力感を持っている者が多いことが推測された。

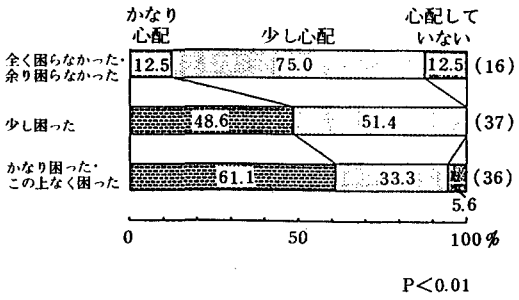

図9　生活困窮感（度）と地震再来不安

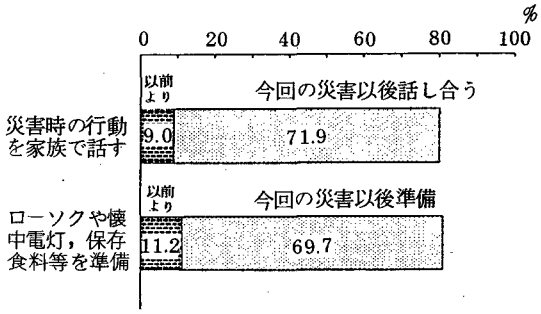

図10　将来の災害に対する準備

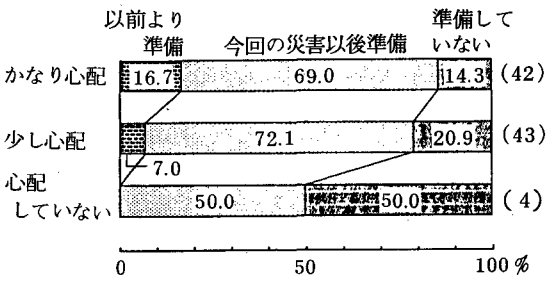

図11　地震再来不安とローソク等の準備

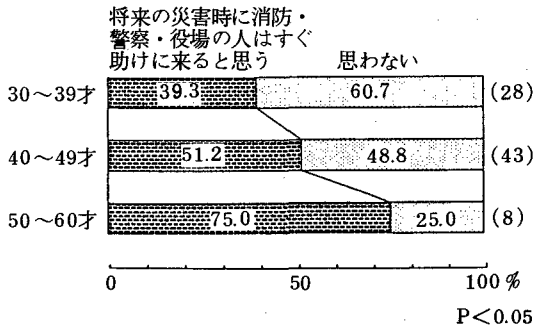

図12　将来の災害時の救助

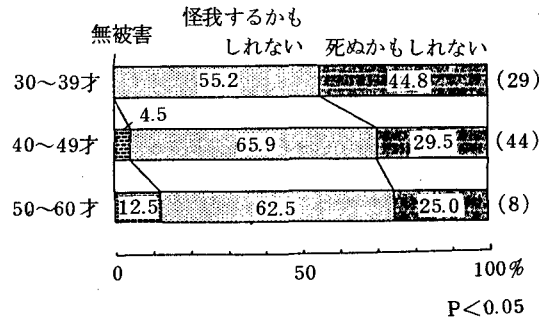

図13　将来の災害時の身体的被害予測

なお，地震予知が可能と思う者は37.0％（かなり可能11.2％，少し可能25.8％；開田村住民ではかなり可能18.9％，少し可能41.2％）おり，80.9％の者は予報が出た時早く避難すると答えていたが，死んでもいいから家にいると答える者も2.2％いた（図14）。

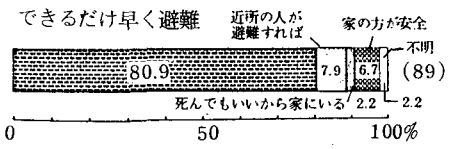

図14　将来の地震予報時の避難

なお，過去の地震例を検討すると地震発生後ほぼ例外なく地震再来・二次災害発生などの流言が生じている。今回の長野県西部地震においても予想通り「裏山が崩れる」，「ダムが決壊する」などの流言が発生したが，本論文では扱わない。

(5)　行方不明者に関する噂と感情

本災害においては，土石流により29名が生埋（すなわち行方不明）となり連日の捜索により，毎日数名ずつ遺体が発見されるという状況にあった。この時，興味深いことに，行方不明者に関し，『（本当は死亡していた）行方不明者が避難（生存）しているのを見た』という噂が発生し，27.0％の者が聞いており，親戚の数が多い者ほど聞いていた（図15）。交際範囲が広い者はそれだけ様々の情報に接する機会が多いのであろう。これまで，地震再来のように脅威を与える事象発生に関する噂・流言は数多く指摘されているが，行方不明者生存のように実現を望む噂は報告が少ない。しかし，我々は1982年長崎水害の際にも発生したことを確認しており（若林・花井・望月，1986），行方不明者が出る災害では一般的に発生する可能性が高い。発生源は明らかではないが遺族に対する慰めの言葉が関与し，死者がでることに対する現実否認的傾向が根底にあると推測されよう。図8に示したように行方不明者のことは地震再来と並び住民の関心事の最たるものであった。

Allport,G.W.& Postman,L.J.（1947）の言うように事象の重要度と不確実性のある場合に流言・噂は発生・流布すると言えよう。

噂を聞いた者の内16.7％が信じており（半信半疑66.6％；信じない16.7％），内向的な者ほど信ずる傾向にあった（図16）。

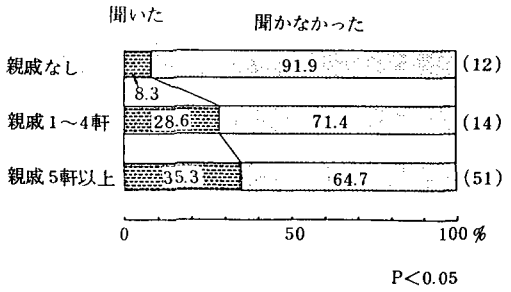

図15　親戚の数と行方不明者生存の噂

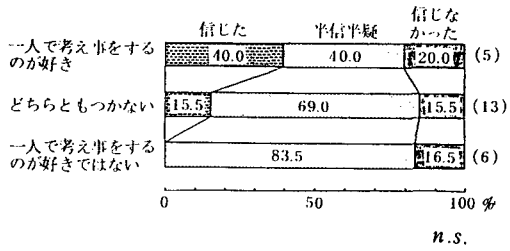

図16　内向性と行方不明者生存の噂

行方不明者を死亡と思った期日は，地震当日が最も多いが，3週間後になってようやく死亡と思った者もおり，村内に親戚や友人が多いがその中に行方不明者や死者のいない者の方が行方不明者を死亡と思うまでの期間が長く，一方，村内に親戚や友人がおらず行方不明者や死者と個人的繋りのない者では地震当日に死亡と思う者が多かった。更に，災害後約2.5ヶ月たった調査時でも，行方不明者は生きているかもしれないと思うことがあると答える者もおり，行方不明者や死者と個人的繋りのある者に多かった。生存者・遺族の諦めと願望を推測することができる。

また，自分が助かったことを偶然だと思う者は66.3％おり，家屋被害があった者に多かった(図17)。

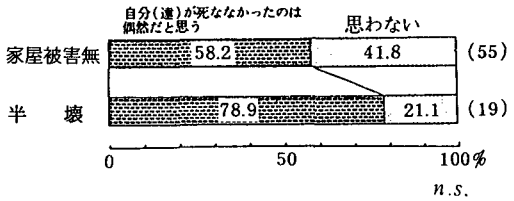

図17　家屋被害と助かったことの偶然性意識

更に，生き残ったことに対し罪悪感（『助かってかえって悪いことをしたような気持ち』）を感じた者は32.5%おり，女性・中高年者に多く（図18），また，親戚や友人が多く死者と個人的繋りを持つ者の方が罪悪感は高かった（図19）。これまで，生存者の至福感について言及した報告は多いが（Wallace,A.F.C.,1956），生存者の罪悪感に関する研究はほとんどない。この感情に続いてどのような感情（例えば，使命感）をもちどのような対応をしていくのか，今後更に検討を加えていきたい。

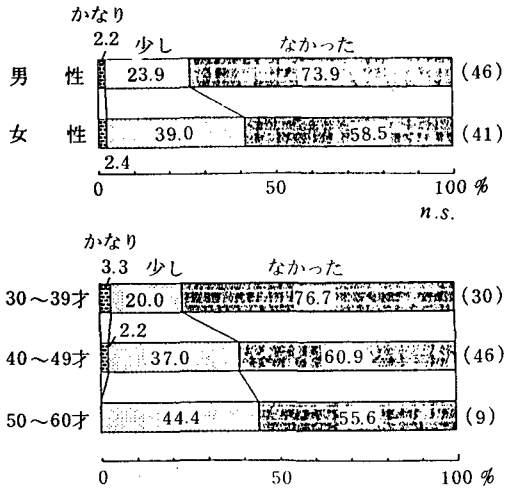

図18　助かったことの罪悪感

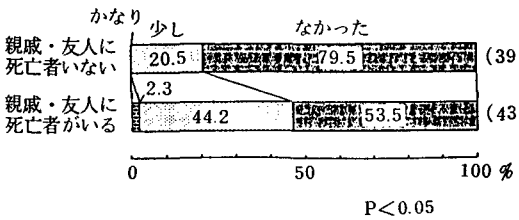

図19　親戚・友人の死亡と助かったことの罪悪感

(6) 県・村，報道，研究者に対する評価と感情

県・村の救援活動に対して92.1%の者が高く評価していた。

報道に対しては80.9%の者が役立ったと評価していたが，一方で報道関係者から迷惑を受けた者は33.7%おり，その内容は過度の取材・私物の無断使用・誤報などであった。そして，大多数(89.9%）の者は報道関係者に拒否的感情（『そっとしてほしい』）を持ち，仮住い者（図20）に多かった。仮住い者は長時間，繰返し取材を受けたためであろう。また，親戚が多い者・親戚や友人に死者がいる者（図21）に多かった。親戚が多い者はそれだけその土地に一体感を持ち，そうした人は外部者に汚されたくないという感情をもっているのかもしれない。また，死者は神聖であり侵すべからざるものとしてとらえられるのかもしれない。

大学等の研究者にも拒否的感情（『もう来てほしくない』）を持つ者が30.3%（「かなり思う」11.2%，「少し思う」19.1%）おり，報道関係者

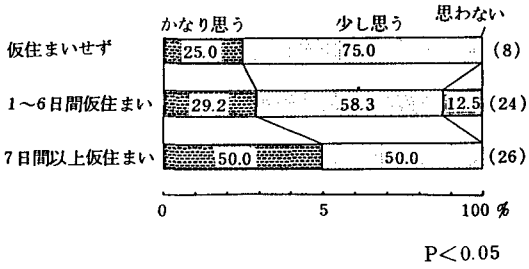

図20　仮住まいとマスコミ拒否感情

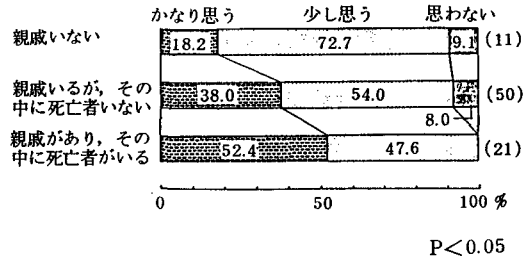

図21　親戚の人的被害とマスコミ拒否感情

に対する感情と関連していた。全般的に外部者に対する拒否的感情が生じたと考えられよう。これは，人口約1600名で地縁・血縁的に強く結びついている小山村に，多くの報道関係者・研究者が入りこんだことが強く作用しているのであろう。いずれにしても，今後，災害後の人の集中現象について一層の検討が必要であると考えられる。

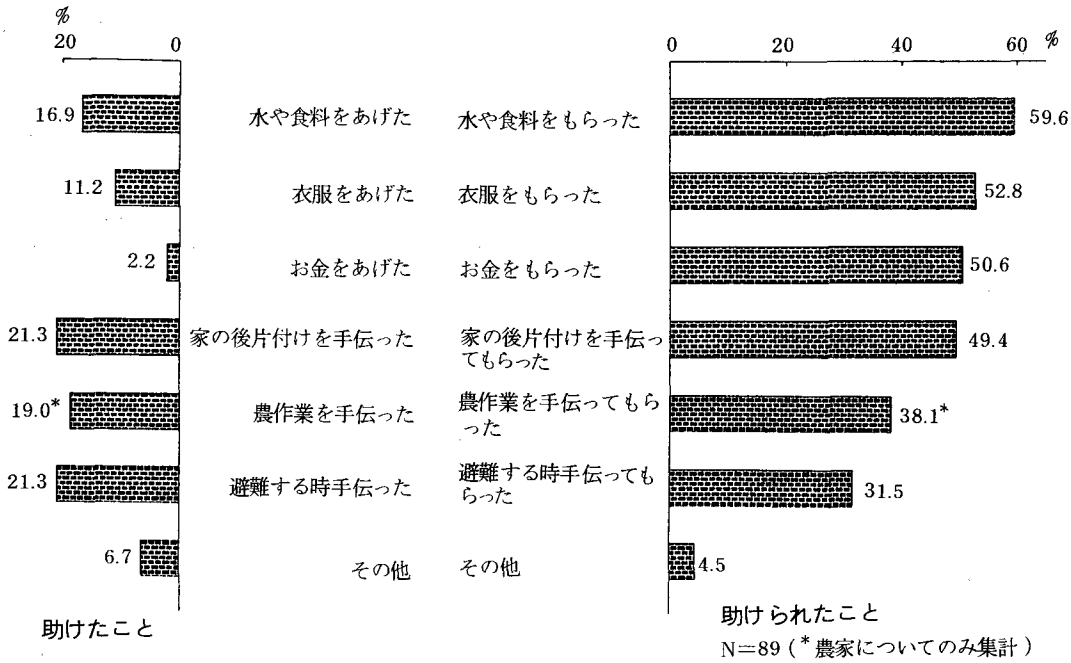

図22　援助の内容

(7)　援助行動

災害後の復旧過程においては援助行動が生ずることが知られている。王滝村の場合（図22），43.8%の者が何らかの援助行動を行なっており，69.7%の者が何らかの援助行動を受けていた。（注3,4）。

受けた援助の内容は『水・食料をもらった』が最も多く59.6%，次いで『衣服をもらった』52.8%，『お金をもらった』50.6%の順となっていた。そして，仮住まい期間の長い者の方が援助を受けていた（図23）。また，親戚の多い者も援助・被

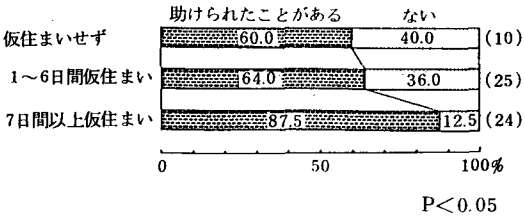

図23　仮住まいと被援助

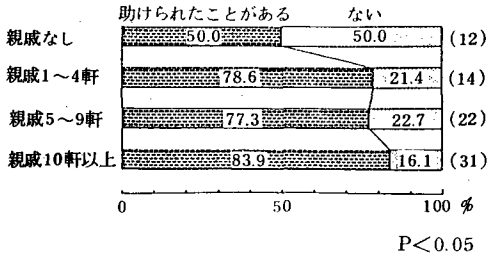

図24　親戚の数と被援助

援助が多かった（図24）が，これは，前述したように王滝村の住民は姻戚関係で緊密に関連しあっており，親戚相互間で援助行動が行なわれることが多かったことを示唆している。なお，もらった生活物資の品目名は中林・塩野・望月（1985）を参照していただきたい。

また，被災時は丁度稲かり期直前であったが，農作業の手伝いを受けた者は農業を行なっている者の38.1％（全体の21.3％），一方，農作業の手伝いをした者は農業を行なっている者の20.5％（全体の15.7％）であった。

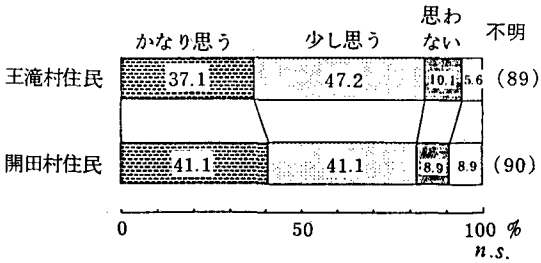

図25　「災害は自然を破壊しすぎたことに対する教訓」

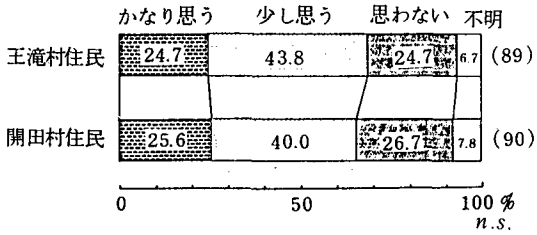

図26　「災害にあって助かるか否かは運命によって決まっている」という考え

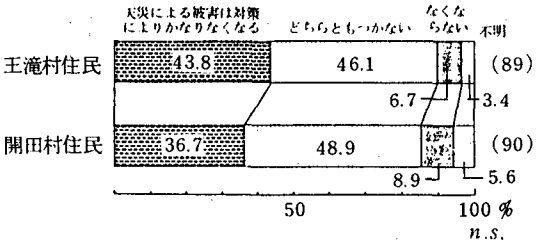

図27　国・県・市町村による防災対策有効性

なお，21.3％の者が災害後近所づきあいが親しくなったと述べており，共通の被災体験を持つ者同志の親近感・連帯感が生まれたことが考えられた。

(8)　災害観

被災者は特有の災害観をもつことが推測されている。『災害は過度の自然破壊に対する教訓』という考えに対し同意する者は多く（図25），『災害は日本人に対する教訓』という考えに対し同意する者もおり（「かなり思う」7.9％，「少し思う」27.0％），これら両者の間に高い関連があった。また，『災害時の生死は運命により決まっている』という考えに同意する者も多かった（図26）。『天災の被害は国県市町村の対策によりなくならない』，『天災の被害は各家庭の準備・対策によりなくならない』という考えに同意する者はそれぞれ6.7％，13.5％いた（図27）。しかし，これらの意識は王滝村住民と開田村住民の間に差は全くなく，更に，王滝村住民の中にあっても被害状況との間にも著明な関連はなく，被災経験によって災害観が急激に変容するとは考えにくい。また，災害観と地震に対する実際の準備行動や被害予測との間に関連はなかった。

なお，災害運命観とRotter，J. B. の外的統制との間に若干の関連が認められた。「災害にあって助かるか否かは運命によって決まっている」と「自分の人生は運命によって決められていると思う」の間のスピアマン順位相関係数 r_s は 0.50（$P<0.01$），「国・県・市町村による防災対策有効性」と「努力すればどんなことでも自分の力でできると思う」の間の r_s は 0.21（$P<0.05$）であった。今後，災害と災害観・性格特性の変容について，一層の検討が必要であろう。

謝辞

調査を進めるに当たって，川合仁志氏（当時・王滝小中学校校長），下条進氏（開田小学校校長）の協力があった。記して感謝したい。

注

1）開田村住民の調査では，死者の割合は家族（0.0％），開田村の親戚（5.6％），開田村の友人（4.4％），王滝村

の親戚(4.4%)，王滝村の友人(3.3%)であった。

2) 開田村住民に対する同形式の質問によれば，このうえなく困った(0.0%)，かなり困った(4.4%)，少し困った(13.3%)，あまり困らなかった(30.0%)，全く困らなかった(48.9%)であった。

3) もちろん，本調査後においても，援助物資(特に，膨大な量の古着)は日本各地から届き，被災者全員に配布しても余り，多くは無用の長物となり，他の被災地や福祉施設に送られ，更に余った物は廃品回収業者に売り渡されることとなった。救援者の善意と無理解を被災者はどのように受け止めたのであろうか。ともあれ，援助物資の過剰集中があったのであり，被災地外の救援者の提供物と被災者の必要物との間に大きなくい違いがあったと言えよう。

4) ところで木曾御岳山の噴火後に，本研究の対象地・王滝村，開田村などにおいて，災害時の援助に関する意識が調べられている(中村，1981)。われわれは開田村住民における実際の援助と援助規範意識を検討した。

開田村住民の王滝村住民に対する援助を調べると，水・食料の提供や農作業や後片付の手伝い(王滝村の親戚に対して7.8%，親戚がいる者に対して再集計すると31.6%：王滝村の親しい人に対して5.6%，親しい者がいる者について再集計すると11.1%)，義援金(71.1%)の他，消防団による行方不明者の捜索であった。

また，援助意識については，将来また災害があった親戚や知人が被害にあったら，「積極的に手伝いや援助をする」と答える者は94.4%，「頼まれれば助ける」と答える者は3.3%であり，また，知り合いではなくてもこの村や近くの村で被害にあった人がでたら，「積極的に手伝いや援助をする」と答える者は68.9%，「頼まれれば助ける」と答える者は27.8%であり，中村らの調査よりも「積極的援助」の割合は高かった。実際に大災害が発生し被災者の窮乏の様子を見聞することによって援助意識は高まるのかもしれない。

これらの援助意識は，また，他の援助予測(道に迷っている人・道ばたにうずくまっている人に対する行動など)も，実際の援助と関連はなかった。実際の援助は村単位，組織(消防団)単位，親戚単位でおこなわれ，個人の援助意識が関与することが少ないためと考えられた。

文 献 一 覧

Allport, G. W. & Postman, L. J.

1947 The psychology of rumor. New York: Henry Holt.

荒木憲一・高橋良・中根允文・太田保之・石沢宗和・富永泰規・内野淳

1985 「自然災害と精神疾患 ―長崎水害(1982)の精神医学的研究―」 精神神経学雑誌，87巻 285-302.

Friedsam, H. J.

1961 "Reactions of older persons to disaster-caused losses: an hypothesis of relative deprivation" *Gerontologist* 1, 34-37.

中林一樹・塩野計司・望月利男

1985 「地震被害に起因する世帯単位での生活支障とその応急対応・生活復旧過程に関する研究 ― 1984年長野県西部地震に関する王滝村住民へのアンケート調査から―」総合都市研究 26号，pp. 121―146。

中村陽吉

1981 「災害時の援助行動」 広瀬弘忠(編)『災害への社会科学的アプローチ』新曜社 165-194.

東京大学新聞研究所

1981 「続・地震予知と社会的反応」

若林佳史・望月利男

1985 「1984年世田谷電話局洞道内通信ケーブル火災事故の独居老人に対する影響」総合都市研究 25号，45-65.

若林佳史・花井徳寶・望月利男

1986 「1982年長崎水害の住民に与えた心理的影響 ―鳴滝，芒塚地区住民について―」準備中

Wallace, A. F. C.

1956 Tornado in Worcester: An exploratory study of individual and community behavior in an extreme situation. Washington, D. C.: National Academy of Sciences, National Research Council.

Key Words

Psychological Influence（心理的反応），**Psychosomatic Conditions**（心身状態），**Earthquake**（地震），**Helping Behavior**（援助）

補遺 1.　王滝村住民に対するアンケート用紙

【 1 】　9月14日の地震から現在まで，体の具合はどうでしたか。

〔 1－1 〕 血圧が上がったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－2 〕 便秘や下痢で困ったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－3 〕 動悸が気になったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－4 〕 よく眠れなかったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－5 〕 食欲不振になったことはありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－6 〕 理由もなく疲れたような感じになったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－7 〕 頭痛がして困ったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－8 〕 何か悪いことが起こりはしないかと心配になったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－9 〕 気持がピリピリと張りつめることがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－10〕 頭の中がもやもやして重い感じになったことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－11〕 何もする気がおこらないことがありましたか。

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

〔 1－12〕 その他（具体的に：　　）

1.　かなりあった　　2.　少しあった　　3.　なかった

【 2 】　9月14日の地震から現在まで，どんなことを考えましたか。

〔 2－1 〕 将来の生活のことを考えましたか。

1.　よく考えた　　2.　少し考えた　　3.　考えなかった

〔 2－2 〕 家の修理のことを考えましたか

1.　よく考えた　　2.　少し考えた　　3.　考えなかった

〔 2－3 〕 仕事や収入のことを考えましたか。

1.　よく考えた　　2.　少し考えた　　3.　考えなかった

〔 2－4 〕 地震がまた起こるのではないかということを考えましたか。

1.　よく考えた　　2.　少し考えた　　3.　考えなかった

〔 2－5 〕 川の水位のことを考えましたか。

1.　よく考えた　　2.　少し考えた　　3.　考えなかった

〔２－６〕 道路の復旧のことを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

〔２－７〕 自分の健康のことを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

〔２－８〕 家族の健康のことを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

〔２－９〕 行方不明者のことを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

〔２－10〕 観光客が来てくれるかということを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

〔２－11〕 農作物のことを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

〔２－12〕 昔のことを考えましたか。

1. よく考えた　2. 少し考えた　3. 考えなかった

【３】 9月14日の地震から現在まで，生活はどのくらい困りましたか。

1. 全く困らなかった　2. あまり困らなかった　3. 少し困った

4. かなり困った　5. このうえなく困った

【４】 次に，行方不明になった方や亡くなられた方のことについてうかがいます。

〔４－１〕 本当は行方不明になっていたり，亡くなっていた方が，「地震直後，どこかで避難しているのを見た」といううわさを聞いたことがありますか。

1. 聞いて信じていた　2. 聞いたが半信半疑だった

3. 聞いたが信じなかった　4. 聞かなかった

〔４－２〕 行方不明の方は亡くなっている可能性が高いと言われていますが，ひょっとしてどこかで生きているのではないかと思うことがありますか。

1. しばしばある　2. たまにある　3. な い

〔４－３〕 前の問で「3. ない」と答えた方にうかがいます。

いつごろ「もう亡くなっている」と思いましたか。

1. 地震当日　2. 翌 日　3. 翌々日　4. 1週間後

5. 2週間後　6. 3週間後

〔４－４〕 あなた自身は助かったわけですが，それは偶然だったように思いますか。

1. 思 う　2. 思わない

〔４－５〕 自分や自分達だけが助かって，かえって悪いことをしたような気になったことがありましたか。

1. かなりあった　2. 少しあった　3. なかった

【５】 次に，災害についてのお考えをうかがいます。

〔５－１〕 今回の災害でいろいろの救援活動がありましたが，県や村はよくやってくれましたか。

1. は い　2. いいえ

〔５－２〕 将来のことについてうかがいます。

将来もまた，同じような災害がおこるのではないかと心配になることがありますか。

1. かなり心配　2. 少し心配　3. あまり心配していない

〔5－3〕 将来，災害が起こった時どうするかということについて，家族の中でいろいろ話していますか。

1. 今回の災害以前から話し合っていた
2. 今回の災害以後，話し合った
3. とくに話し合っていない

〔5－4〕 いざという時のために，ローソクや懐中電灯，保存食料などを用意していますか。

1. 前からかなり用意していた
2. 今回の災害をきっかけに，いろいろ物をふやした
3. あまりしていない

〔5－5〕 将来，同じような災害が起こったら，ケガをしない自信はありますか。

1. 自信がある　2. ケガをするかも知れないと思う　3. 死ぬかも知れないと思う。

〔5－6〕 将来，同じような災害が起こったら，消防や警察や役場の人はすぐに助けに来てくれると思いますか。

1. はい　2. いいえ

〔5－7〕 次に，災害の予測や予報ということについてうかがいます。

現在の科学の水準で，地震を予測することができると思いますか。

地震については，どうお考えですか。

1. かなり予測できると思う。　2. 少し予測できると思う　3. あまり予測できないと思う

〔5－8〕 国や県が天災の予報を出すとき，予報の出しかたについていくつかの考え方があります。

次の2つのうちでは，どちらがよいと思いますか。

1. 確実でなくてもいいから，早く　2. 社会が混乱すると困るから慎重に

〔5－9〕 将来，地震の予報が出たら，避難しますか。

1. できるだけ早く避難する　2. 近所の人が避難すれば避難する
3. 今度は死んでもいいから家にいる　4. 家の方が安全だと思う

〔5－10〕 ところで，「何月何日に災害が起こる」という予言やうらないがしばしば出されますが，信じるほうですか。

1. かなり信じる　2. 少し信じる　3. 全く信じない

〔5－11〕 また，災害の前には動物が騒ぐという話がありますが，信じるほうですか。

1. かなり信じる　2. 少し信じる　3. 全く信じない

〔5－12〕 次に，今回の災害にかぎらず，一般的な災害についてうかがいます。

「災害は自然を破壊しすぎたことに対する教訓である」という考え方がありますが，この考え方をどう思いますか。

1. かなりそう思う　2. 少しそう思う　3. そうは思わない

〔5－13〕 また，「災害は日本人が浮かれすぎたことに対する教訓である」という考え方についてはどうですか。

1. かなりそう思う　2. 少しそう思う　3. そうは思わない

〔5－14〕 また，「災害にあって助かるか否かは運命によって決まっている」という考え方についてはどうですか。

1. かなりそう思う　2. 少しそう思う　3. そうは思わない

〔5－15〕 天災による被害は，国や県や市町村などが事前に十分な対策をたてておけば，かなりなくなると思いますか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔5－16〕 では，同じように，天災による被害は，各家庭でいろいろ準備したり，対策をたてておけば，かなりなくなると思いますか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

【6】 次に，マスコミについてうかがいます。

〔6－1〕 災害のとき，いろいろの報道がありましたが，役に立ちましたか。

1. かなり役に立った　2. 少し役に立った　3. 役立たなかった

〔6－2〕 また，多くのマスコミの人が取材に来たと思いますが，自分達をそっとしておいてほしいと思ったことがありますか。

1. かなりある　2. 少しある　3. ない

〔6－3〕 テレビ局や新聞社の人が迷惑をかけたことはありますか。

1. ない　2. ある（どのようなことか具体的に　）

〔6－4〕 また，マスコミの人ばかりではなく，多くの大学の研究者も，いろいろ調べに来ましたが，もう来てほしくないと思うことがありますか。

1. かなり思う　2. 少し思う　3. 別に思わない

【7】 次に，普段の考え方や感じ方についてうかがいます。

〔7－1〕 自分の人生は運命によって決められていると思いますか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－2〕 努力すればどんなことでも自分の力でできると思いますか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－3〕 人と広く付き合うのが好きなほうでしたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－4〕 一人で考え事をするのが好きなほうでしたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－5〕 昔のことについてくよくよするほうでしたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－6〕 一寸したことで心配になったり，憂鬱になったりするほうでしたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－7〕 もののはずみで物事をすることがよくありましたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－8〕 前もって十分に注意深く計画をたてるのが好きなほうでしたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－9〕 人に負けたり，誤解されたりするとくやしいと思うほうですか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－10〕 人から目立たないようにしているほうでしたか。

1. はい　2. どちらともつかない　3. いいえ

〔7－11〕 旅館などに行ったら，非常口や避難口を確認するほうでしたか。

1. 必ずする　2. するが忘れてしまう　3. 確認しない

〔7－12〕 外出するとき，火の元などを何度も調べるほうでしたか。

1. はい　2. いいえ

【8】 最後に，近所づきあい，親戚づきあいなどについてうかがいます。

〔8－1〕 村内に親戚の方は何軒くらい住んでいますか。

（　　）軒

〔8－2〕 村内に家族ぐるみで行き来していた家（親戚を含む）はありましたか。

1. たくさんいた　2. 少しいた　3. あまりいなかった

（　　）軒

〔8－3〕 村の自治会や婦人会，老人会などの役員をしたことがありますか。

1. 自分自身した　2. 家族の者がした　3. したことがない

〔8－4〕 村の集まりや会合によく出席されたほうですか。

1. 自分自身よく出席　2. 家族のものがよく出席

3. あまり出席しない

〔8－5〕 村内に住む親戚の方の被害についてうかがいます。

建物はどうでしたか。

1. 被害のあった親戚はいない　2. 少し壊れた家がある

3. 全壊した家がある　4. 村内に親戚はいない

〔8－6〕 村内に住む親戚の方のケガについてうかがいます。

1. ケガした者はいない　2. ケガした者がいる

3. 死亡したものがいる　4. 村内に親戚はいない

〔8－7〕 村内の，親戚以外の親しい人のなかで，ケガをした方はいましたか。

1. ケガした者はいない　2. ケガした者がいる

3. 死亡したものがいる　4. 村内に親しい人はいない

〔8－8〕 災害後，近所づきあいはどうなりましたか。

地震前にくらべて，

1. 親しくなった　2. かわらない　3. 悪くなった

〔8－9〕 災害が起こってから，あまり親しくない人やあまりよく知らない人と話し合ったり，相談したことがありましたか。

1. ある　2. ない

〔8－10〕 (1) では，災害後，誰かに助けられたことがありますか。

1. ある　2. ない

(2) 前の問で「1. ある」と答えた方にうかがいます。

どんなことで助けてもらいましたか。 あてはまるものにいくつでも○を付けてください。

1. 水や食料をもらった　2. 衣服をもらった

3. お金をもらった　4. 避難するとき，手伝ってもらった

5. 家の後片づけを手伝ってもらった　6. 農作業を手伝ってもらった

7. その他（　　）

〔8－11〕 (1) では，逆に，誰かを助けたことはありますか。

1. ある　2. ない

(2) 前の問で「1. ある」と答えた方にうかがいます。

どんなことを助けてあげましたか。 あてはまるものにいくつでも○を付けてください。

1. 水や食料をあげた　　2. 衣服をあげた
3. お金をあげた　　4. 避難するとき，手伝った
5. 家の後片づけを手伝った　　6. 農作業を手伝った
7. その他（　　）

【9】 あなたの年齢は ＿＿＿＿ 歳

【10】 あなたの性別は　1. 男　2. 女

【11】 さしつかえなければ，次の項目にお答えください。

〔11－1〕 あなたのお名前は ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〔11－2〕 あなたの住所は　王滝村 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿